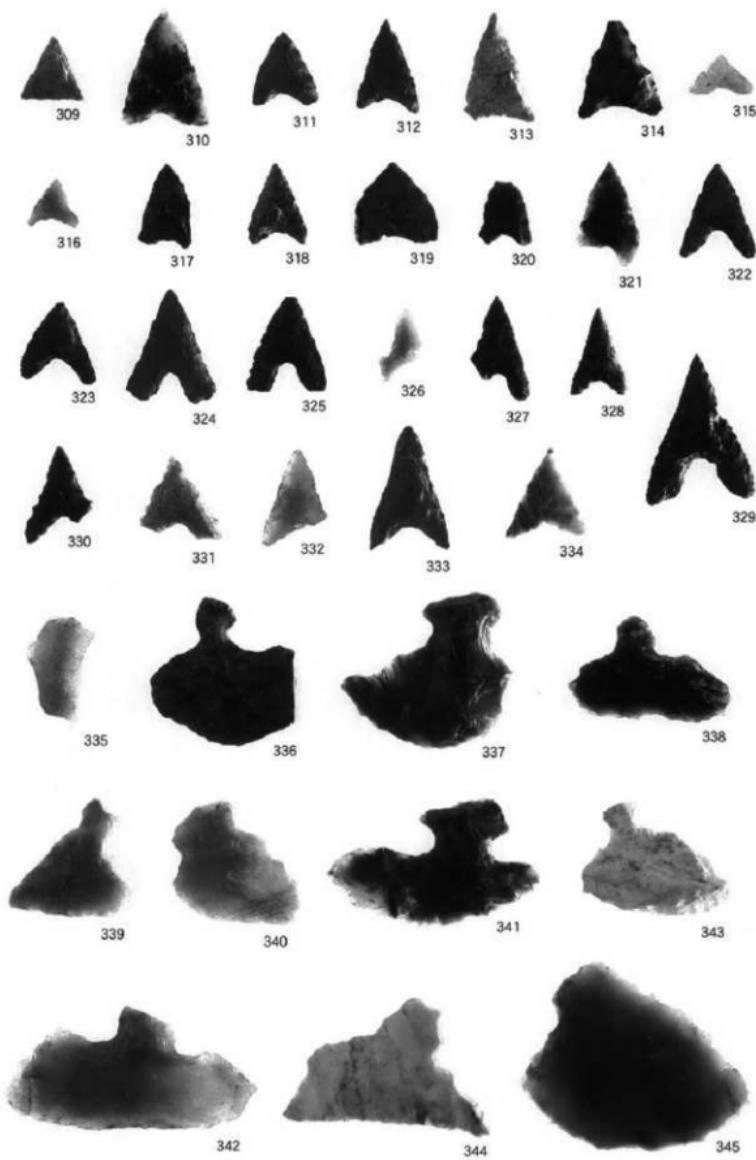
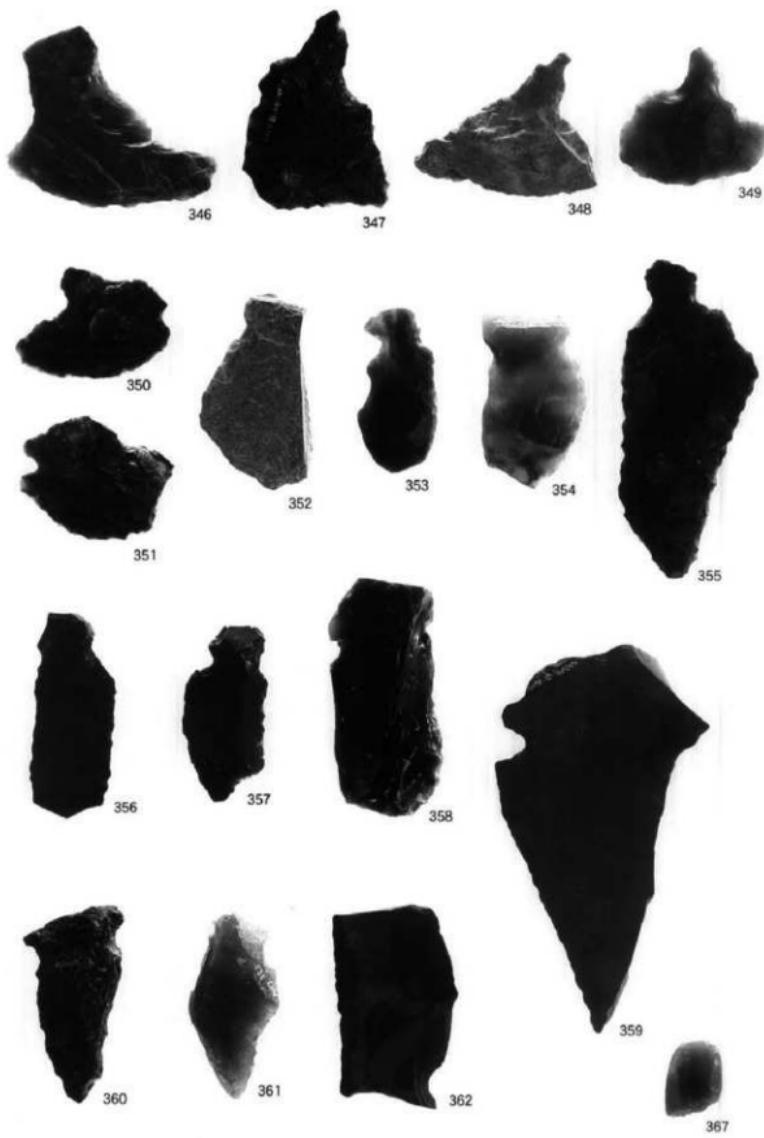


写真図版33 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土土器（弥生時代以降）



写真図版34 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器①



写真図版35 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器②



370



363



364

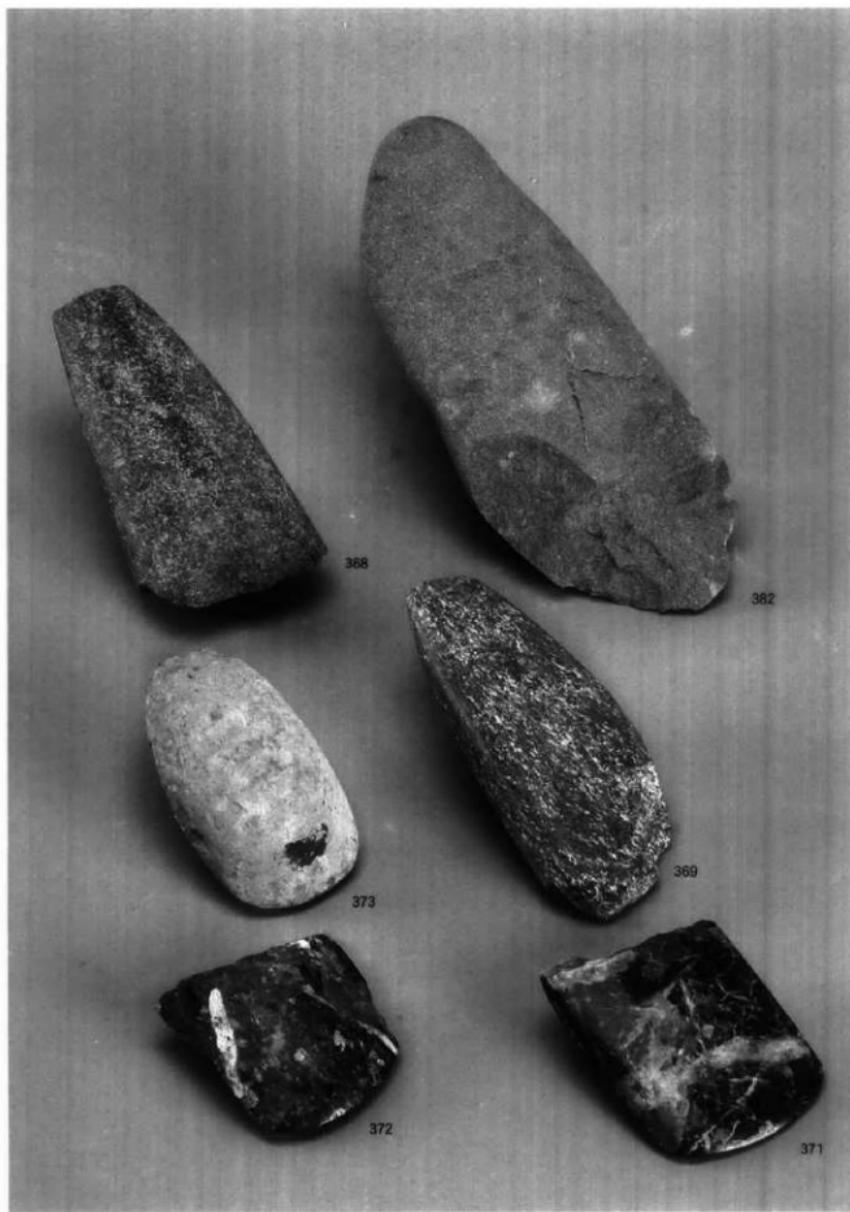


365

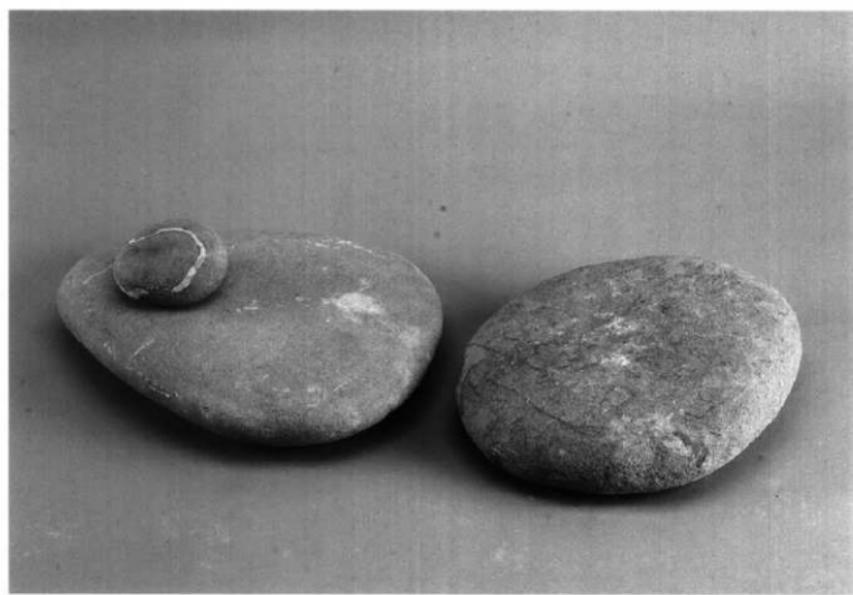
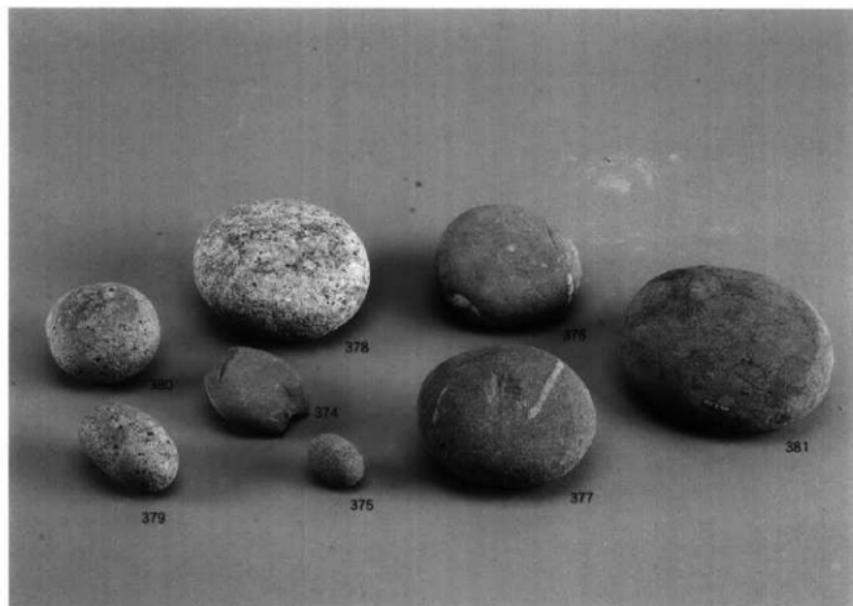


366

写真図版36 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器③



写真図版37 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器④



写真図版38 アカホヤ火山灰層上位遺物包含層出土石器⑤

第Ⅳ章 まとめ

集石遺構の使用時期と土器形式別出土状況の関係について

当遺跡における集石遺構の使用時期は、大別して以下の6時期である。

1) 9350年 BP頃

「ボウル状の大型の掘り込みを持ち、かなり磨耗した礫が掘り込み中央に集中するタイプ」の集石遺構。同時期・同タイプの集石遺構が山田第1遺跡や坂元遺跡（E区）でも確認されている。

2) 8500年 BP～8200年 BP頃

ほとんどの集石遺構が「掘り込みを持つタイプ」の集石遺構で、集石遺構の規模も大小様々だが、8300年 BP～8200年 BPにかけては、「断面がV字型の極めて大型の掘り込みを持ち、使用されている礫が大量でギッシリと詰っているタイプ」の集石遺構が確認されている。このような超大型タイプの集石遺構は、白ヶ野第1遺跡や白ヶ野第4遺跡、坂元遺跡（B区）や須田木遺跡でも検出されているが、いずれの使用時期もほぼ同じである。

3) 7500年 BP頃

「礫が平面的（円形）に集中するタイプ」の集石遺構で、このタイプの集石遺構は掘り込みが確認しにくいという特徴を持つ。当台地上ではこの時期の集石遺構はあまり検出されていない。

4) 6800年 BP頃

アカホヤ火山灰層降下直前の集石遺構で、当台地上ではこの時期の集石遺構はほとんど検出されていない。円形の掘り込みを持ち礫がギッシリと詰った小型の集石遺構である。

5) 5500年 BP頃

「円形の浅皿状の掘り込みを持ち礫はあまり密ではないタイプ」の集石遺構で、この時期の集石遺構は当遺跡でしか検出されていない。

6) 3500年 BP頃

5) とはほぼ同じタイプの集石遺構である。

この集石遺構の使用時期の変遷と包含層出土土器の形式別出土状況（第3表参照）をあわせて考えると、興味深い傾向が幾つかみられる。

まずは、2) の時期の超大型の集石遺構と押型文土器及び平柄式土器との関係である。これまで整理作業が行われた船引地区遺跡群の中で、このタイプの集石遺構が検出された遺跡は当遺跡に加え白ヶ野第1遺跡・第4遺跡と坂元遺跡（B区）であるが、当遺跡と白ヶ野第1遺跡については出土土器（縄文早期）の約半数を平柄式土器が占めている。一方、坂元遺跡（B区）では、平柄式土器はほとんど確認されず、押型文土器がその約半数を占めているため、同じタイプ（=超大型）の集石遺構が検出されている同台地上の複数の遺跡における土器の出土傾向が、全く異なる結果となっている。これは押型文土器と平柄式土器の使用時期を考察するうえでなんらかの意味を持つと推測されるため、今後の整理作業により詳細な検討を加えていきたい。

もう一点は、貝殻条痕文土器（早期）や縄文時代前期土器の出土状況と4)～6)の集石遺構との関係である。当遺跡では近隣では出土量の比較的小ない貝殻条痕文土器（早期）がかなり多く出土し、それに加えてⅢ層（=2次アカホヤ）からは貝殻条痕文を地に施した轟式土器や野口式土器、又曾畠式土器といった縄文時代前期の土器が多く出土している。又、集石遺構については、アカホヤ火山灰降下直前と降下後のものが当台地上では唯一検出されているが、そのプランや規模は降下前後ではあまり変化は見られない。これらのことから総合的に考察すると、「アカホヤ火山灰降下前後に於ける当遺跡の状況は大きく変化しておらず、すなわち当遺跡におけるアカホヤ火山灰による影響は比較的小規模で、生活文化の完全な断絶は無かった。」という推論が成り立つのではないかと思われるが、当台地上におけるこの時期の遺構や遺物の検出例が少なく、又、縄文時代早期末の南九州の生活文化と縄文時代前期の西・北九州の生活文化の比較も不十分なことから、現段階ではこの推論はあくまで筆者の私見の域にとどめておきたい。

アカホヤ火山灰降灰前後の石器の比較

滑川第一遺跡ではアカホヤ火山灰層の上位と下位において多くの遺物が出土した。土器の平面分布には偏りが見られず土器の分布状況においては特徴を見出すことは困難であった。しかし、アカホヤ火山灰層を挟んだ上下の層における出土石器の様相を検討してみるといくつかの特徴を見られた。以下にその特徴について述べる。

アカホヤ火山灰層上位の遺物包含層からは縄文前期から古代までの土器が出土している。しかし出土量が最も多いのは縄文前期の土器であり、一応石器についてもその主体は縄文前期のものと考えておく。

①石器組成の割合が変化する。

製品類に注目して道具ごとの割合を比較してみると第14表のようになる。狩猟具の割合は縄文早期においては非常に高いが、アカホヤ火山灰層上位においては3分の1に減っている。対して堅果類の調理具である敲石・磨石・石皿の割合は縄文早期に比べアカホヤ火山灰層の上位では倍以上の割合を占めるようになる。また工具についてもアカホヤ火山灰層上位においては縄文早期の5倍近くに増加している。

同台地上の縄文早期の遺跡では本遺跡と同様に狩猟具の占める割合は高い傾向が確認されている。近接する坂元遺跡では縄文早期の石器の出土点数は151点にのぼる。また山田第一遺跡でも縄文早期における石器の製品類の77.9%が狩猟具であり、堅果類の調理具は14.3%に過ぎないという状況となっている。このような狩猟具と調理具の占有率の変化から、アカホヤ火山灰降灰前後において生業システムに変化があったことが感じられる。

第14表 滑川第1遺跡出土石器製品の割合 (%)

縄文時代早期: 製品126点		アカホヤ火山灰層上位: 製品143点	
狩猟具	75.3	石鏃	71.3
		尖頭状石器	2.4
		尖頭器	1.6
工具	8.8	石匙	4
		スクレイパー	4
		石斧	0.8
堅果類 調理具	15.9	敲石	3.2
		磨石	9.5
		石皿	3.2
その他	0		
狩猟具	23.1	石鏃	23.1
		石匙	
		スクレイパー	
工具	40.6	石匙	1.4
		スクレイパー	11.2
		石斧	4.2
堅果類 調理具	34.9	堅果類 調理具	0.7
		敲石	5.5
		磨石	21
その他	1.4	石皿	8.4
		石鏃	0.7
		装身具	0.7

②石鏃の使用石材の変化

つぎに石鏃の使用石材に注目すると縄文時代早期では桑ノ木津留産黒曜石が21点、チャートが19点とこの2種類でほぼ半数を占めている。一方アカホヤ火山灰層上位では桑ノ木津留産黒曜石製のものは1点しか見られず、ほとんど使用されなくなっている。しかし、チャートの使用率についてはあまり変化は見られない。また西北九州産の黒曜石と流紋岩・頁岩の使用率は縄文早期に比べ若干増加している。

第15表 滑川第1遺跡出土石鏃の使用石材の割合 (%)

縄文時代早期: 90点		アカホヤ火山灰層上位: 33点	
チャート	21.1	チャート	24.2
黒曜石	桑ノ木津留	桑ノ木津留	3
	姫島	姫島	15.2
	西北九州産	西北九州産	15.2
	鹿児島産	鹿児島産	0
安山岩・サスカイト	12.2	安山岩・サスカイト	9.1
流紋岩・頁岩	17.8	流紋岩・頁岩	30.3
玉髓	6.8	玉髓	3
その他	2.2	その他	0

③鹿児島県産黒曜石の使用增加

肉眼観察において検討であり、問題が残る分析であるが、縄文早期の包含層からは鹿児島県産黒曜石の資料は9点(18.7g)しか出土しておらず、石核は1点もない。一方アカホヤ火山灰層上位の包含層からは石核12点を含む88点(217.7g)もの資料が出土している。本遺跡においてはアカホヤ火山灰降灰後に鹿児島県産黒曜石の利用が進み、遺跡内で鹿児島県産黒曜石製の石器が製作されたことをあらわしている。先に述べた桑ノ木津留産黒曜石があまり利用されなくなったことが要因となっているかもしれない。このような現象が本遺跡における現象であるのか地域的な現象であるのかを今後検討していくことが課題である。

滑川第1遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	NK1 SI-6	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.2	NK1 SI-8	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.3	NK1 SI-12	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.4	NK1 SI-13	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.5	NK1 SI-20	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.6	NK1 SI-22	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.7	NK1 SI-26	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.8	NK1 SI-27(C8)	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.9	NK1 SI-28	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.10	NK1 SI-30	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.11	NK1 SI-31(配石下)	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.12	NK1 SI-34	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.13	NK1 SI-36	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.14	NK1 SI-38	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.15	NK1 SI-41	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.16	NK1 SI-42	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.17	NK1 SI-43	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.18	NK1 SI-45	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.19	NK1 SC-204	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.20	NK1 SC-205	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.21	NK1 SC-206	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.22	NK1 SC-208	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄・石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.23	NK1 SA-2	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	加速器質量分析(AMS)法
No.24	NK1 SC-189	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	加速器質量分析(AMS)法
No.25	NK1 No.94(AH上)	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析(AMS)法
No.26	NK1 No.215(AH上)	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析(AMS)法
No.27	NK1 No.285(AH上)	土器付着炭化物	酸洗浄	加速器質量分析(AMS)法

2. 測定結果

試料名	C年代(年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代(年BP)	曆年代(西暦) (1σ :68%確率, 2σ :95%確率)
No.1	7600±150	-26.8	7570±150	交点:cal BC 6430 1σ :cal BC 6505~6245 2σ :cal BC 6675~6090
No.2	8300±70	-27.1	8270±70	交点:cal BC 7320 1σ :cal BC 7460~7180 2σ :cal BC 7515~7080

No.3	6780±60	-25.7	6770±60	交点:cal BC 5660 1 σ :cal BC 5715~5630 2 σ :cal BC 5745~5610
No.4	9310±140	-27.0	9280±140	交点:cal BC 8540 1 σ :cal BC 8705~8295 2 σ :cal BC 9105~9010,8820~8240
No.5	8430±80	-26.7	8400±80	交点:cal BC 7505 1 σ :cal BC 7555~7445,7405~7360 2 σ :cal BC 7585~7300
No.6	3460±50	-24.7	3460±50	交点:cal BC 1750 1 σ :cal BC 1875~1700 2 σ :cal BC 1900~1850
No.7	5470±80	-25.0	5470±80	交点:cal BC 4335 1 σ :cal BC 4360~4245 2 σ :cal BC 4460~4155,4120~4070
No.8	8270±70	-26.0	8250±70	交点:cal BC 7310 1 σ :cal BC 7445~7405,7360~7165 2 σ :cal BC 7495~7070
No.9	8320±120	-25.8	8310±120	交点:cal BC 7430,7420,7350 1 σ :cal BC 7525~7175 2 σ :cal BC 7580~7060
No.10	8320±70	-25.4	8310±70	交点:cal BC 7430,7420,7350 1 σ :cal BC 7490~7300 2 σ :cal BC 7535~7145
No.11	8400±90	-27.3	8360±90	交点:cal BC 7475 1 σ :cal BC 7535~7320 2 σ :cal BC 7580~7165
No.12	8500±80	-26.1	8480±80	交点:cal BC 7555 1 σ :cal BC 7585~7505 2 σ :cal BC 7605~7445,7405~7360
No.13	8430±70	-27.9	8380±70	交点:cal BC 7490 1 σ :cal BC 7535~7430,7420~7350 2 σ :cal BC 7570~7300
No.14	8430±70	-26.1	8410±70	交点:cal BC 7515 1 σ :cal BC 7555~7460 2 σ :cal BC 7580~7320
No.15	8380±70	-26.0	8360±70	交点:cal BC 7475 1 σ :cal BC 7525~7335 2 σ :cal BC 7565~7275,7230~7195
No.16	8250±80	-26.7	8220±80	交点:cal BC 7275,7230,7195 1 σ :cal BC 7345~7080 2 σ :cal BC 7490~7050
No.17	8460±80	-26.5	8440±80	交点:cal BC 7530 1 σ :cal BC 7570~7475 2 σ :cal BC 7595~7330
No.18	8430±70	-25.9	8420±70	交点:cal BC 7520 1 σ :cal BC 7560~7470 2 σ :cal BC 7585~7330
No.19	8270±70	-26.6	8240±70	交点:cal BC 7300 1 σ :cal BC 7430~7420,7350~7145 2 σ :cal BC 7490~7070

No.20	8410±80	-26.2	8390±80	交点:cal BC 7495 1 σ:cal BC 7550~7430,7420~7350 2 σ:cal BC 7580~7290
No.21	8220±80	-26.7	8190±80	交点:cal BC 7175 1 σ:cal BC 7320~7070 2 σ:cal BC 7470~7050
No.22	8320±80	-26.6	8290±80	交点:cal BC 7335 1 σ:cal BC 7480~7185 2 σ:cal BC 7535~7080
No.23	2240±40	-26.3	2220±40	交点:cal BC 360,290,230 1 σ:cal BC 370~200 2 σ:cal BC 390~180
No.24	910±40	-27.0	880±40	交点:cal AD 1180 1 σ:cal AD 1060~1080,1150~1210 2 σ:cal AD 1030~1250
No.25	5240±40	-26.5	5220±40	交点:cal BC 3990 1 σ:cal BC 4040~3980 2 σ:cal BC 4060~3960
No.26	5260±40	-26.6	5230±40	交点:cal BC 4030,4020,4000 1 σ:cal BC 4050~3980 2 σ:cal BC 4150~4120,4070~3960
No.27	4980±40	-26.5	4960±40	交点:cal BC 3710 1 σ:cal BC 3780~3680 2 σ:cal BC 3900~3890,3800~3660

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

^{14}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暗年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暗年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暗年代値を意味する。 1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暗年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

調査抄録

フリガナ	ヌメリカワ ダイイチ				
書名	滑川第1遺跡				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第21集				
編集者名	井田篤・秋成雅博・今村結記				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2006年9月				
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東經	調査期間
滑川第1遺跡	清武町大字 船引字滑川	清武町：209	31° 52' 29"	131° 22' 09"	97.5.6～
					97.10.14
					98.5.6～
					99.3.31
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
17620m ²	農業関連	集落	縄文（早期 ～後期） 弥生・古墳 古代	集石遺構 陥し穴 炉穴 竪穴式住居 など	石器 縄文式土器 弥生式土器 土師器 須恵器 など
特記事項					
大型の集石遺構が数基検出されている。					

清武町埋蔵文化財調査報告書第21集

滑 川 第 1 遺 跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成18年9月29日

編 集 発 行 清武町教育委員会
〒889-1695 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204
TEL 0985-85-1111

印 刷 小柳印刷株式会社
〒889-0803 宮崎市旭1丁目6-25
TEL 0985-24-4155 FAX 0985-24-1512
